今月のことば

monthly word

大塚国際美術館
～技術とコンテンツの融合～

日本弁理士会　副会長
渡邉　伸一

１．はじめに

平成 29 年度副会長の渡邉伸一です。今年の 7 月 8 日，9 日に西日本弁理士クラブの皆さんの旅行会に参加させていただき，徳島県に行って参りました。この機会に，今回は何か地元の美味しいものでもゆっくり食べて帰りたいと思い，復路は遅めの飛行機を予約したのですが，特にプランも立てずにいたところ，同僚副会長の本田淳先生から，大塚国際美術館という，丸一日かけても時間が足りないくらい良い美術館があると聞き，旅行会の 2 日目は自由行動でそちらへ行ってみることにしました。

２．大塚国際美術館

今回宿泊させていただいたのは，大鳴門橋にもほど近い「鳴門グランドホテル」という鯛料理の美味しい宿で，大塚国際美術館までは，ちょっとしたウォーキング感覚で歩いて行ける距離でした。15 分ほど歩くと，大塚国際美術館とその前に建つ竜宮城のような大塚グループの保養所「潮騒荘」が見えてきます。美術館のほうは，地下 5 階，地上 3 階，延床面積 29,412 平方メートルという大きな建物です。エントランスを抜けて，非常に長いエスカレーターを上ると，最初の展示であるシスティーナ礼拝堂の壁画複製があらわれます。この美術館の特徴は，世界の名画を陶板に焼き上げて再現して展示しており，オリジナルの絵は 1 つもないという点です。最初この話を聞いたときは，いったいどういうことか良く理解できませんでした。オリジナルの絵がないというのはどういう意味でしょう？

大塚国際美術館には，世界 25ヶ国 190 余りの美術館が所蔵する西洋名画，1,000 点以上もが「陶板」で原寸大に再現され，展示されています。何故これほどまでの数の絵画のレプリカを「陶板」で作って展示することになったのか。このようなちょっと不思議な美術館が創設されるに至った経緯は，初代館長の大塚正士氏が書かれた「一握りの砂」という文章（大塚国際美術館のシスティーナ礼拝堂前に掲示されており，公式ホームページ等にも掲載）の中で語られておりますので，以下に一部引用して紹介させていただきます。

話は 1971 年頃に遡ります。当時，大塚グループでは，鳴門海峡の白砂をコンクリートの原料として採取し，機帆船で大阪や神戸へ陸揚げして，建築用としてトン幾らで販売していたそうです。しかし，これをタイルにして 1 枚幾らで販売すると非常に価値のある商品になるということで，鳴門の工場内に炉を作りタイルの製造が始められました。単なる原材料の供給事業から，より付加価値の高い商品へと事業が拡充されたわけですね。しかも，次第に大きなタイルが出来るようになり，ついには 1 メートル角のタイルを作っても歪みや割れが一つもなく，20 枚作れば 20 枚とも 100％合格の商品に出来上がるようにまでなったということです。実に素晴らしい技術力です。そして，更に高度な製造技術力を得るため，滋賀県信楽町の近江化学陶器株式会社と大塚グループとの合弁で大塚オーミ陶業株式会社が設立されました。

ところが，会社設立の昭和 48 年には，石油ショックが起こり，石油価格が 12 倍にも高騰し，建築資材としてのタイルの需要が全くなくなるという不運に見舞われます。その時，役員の方々が頭を抱えて考えた結果，「陶板に絵を描いて美術品の方に移行しようじゃないか」という，かなり進歩性がありそうな話になり，まずは尾形光琳の「燕小花」が作られたのだそうです。確かに，絵を描いた大きな陶板を数枚並べれば，陶板で屏風絵が再現されます。その後，より完成度の高い美術品を追求して新しく焼き，作り，壊しながら日々

研究努力が続けられ，2万点に近い色の開発も成し遂げられました。元来こういった有名絵画を陶磁器に，しかも原寸大に複製したというのは，日本は勿論のこと，世界にも例がなく，大塚オーミ陶業は，大型美術陶板という新たな製品領域のパイオニアとして成功を収めたと言えるでしょう。その基礎には，数多くの試行錯誤の末に蓄積されたノウハウ，匠の技があるはずです。その技術の一端は，大塚オーミ陶業の特許出願から窺い知ることが出来るのかもしれません。

結果として，1998年の大塚国際美術館開館時には，1,000点を超える作品が展示されることとなりました。これらの絵は陶器ですから全然変化しません。かつて，中国の景徳鎮や日本の有田焼を積んだオランダ商船が嵐に遭ってインド洋に沈没してから数百年後に引き揚げられたところ，船荷の陶磁器類は昔のままの色と姿で残っていたといいます。現代の特殊技術によって作られた大塚国際美術館収蔵の美術陶板は，2,000年経ってもそのままの姿で残るであろうことから，文化財の保存の形でも貢献しているのだそうです。

以上が私の理解したところによる，大塚国際美術館が作られた大まかな経緯です。しかしこの美術館の凄いところは，やはり，展示されている1,000点超の美術品が全て有名絵画であることです。館内には6名の選定委員が厳選した古代壁画から現代絵画まで至宝の西洋名画がオリジナル作品と同じ大きさで複製，展示されており，美術書や教科書とは違うレベルで，原画が持つ本来の美術的価値を真に味わうことができ，日本に居ながらにして世界の美術館での鑑賞を疑似体験することが可能となっています。また，ここに展示されている陶板には直接，手で触れることができ，画家の筆の動きを指先で感じることもできます。先ほどの「一握りの砂」には，「本館では，東京大学の青柳正規副学長を長として，色々な大学生に美術を教える，ということを基本に考えて古今の西洋名画の中から選んだ作品を展示してあります。これをよく見ていただいて，実際には大学生の時に此処の絵を鑑賞していただいて，将来新婚旅行先の海外で実物の絵を見ていただければ我々は幸いと思っております。」と述べられています。ちなみに，この美術館の中の礼拝堂では，結婚式を挙げることもでき，私が訪れた日も一組のカップルが多くの人々の祝福を受けていました。新婚旅行はバチカンやパドヴァにされたのかもしれません。

結局，この日は昼に一時退館して大鳴門橋まで渦潮を見に行った以外は一日中，美術館内で過ごしました。私はミュージアムのオーディオガイドが大好きで，当然，入館時に即レンタルしたのですが，ここのオーディオガイドはディスプレイ付きのデジタルオーディオプレイヤーに収められており，音声による絵画の解説に加えて，動画による補足解説などもあって大満足でした。上述のように，この美術館には，古代壁画から現代絵画までの西洋の有名絵画が時代を追って順に約4kmにわたり展示されており，その解説を読んだり，聞いたりすることで，西洋の美術史を一通り勉強できます。このような体験は，オリジナルを所蔵している個々の美術館では不可能なことであり，大塚国際美術館は，プロプライエタリな技術によって既存の高価値コンテンツの複製を可能にしたことにより実現された，実にイノベーティブな美術館であると言えるでしょう。

3．おわりに

この日は午後から強い雨が降り始めました。パリ・オランジュリー美術館にあるモネ最晩年の大作，いわゆる「大睡蓮」が，大塚国際美術館では屋外の池に囲まれた庭園に展示されています。雨なので，外には見に行けないかと思ったのですが，ちゃんと鑑賞用に傘が用意されていました。雨に打たれるモネの睡蓮を見るというのは，まさに陶板名画ならではの体験でした。

今回，本田淳副会長のつぶやいた一言で，たまたま訪れた大塚国際美術館でしたが，技術とコンテンツという趣の異なる知財をうまく融合させた例ととらえることもできるかと思い，紹介させていただきました。より詳しくは，本稿の執筆にあたり参考にさせていただいた大塚国際美術館公式ホームページ（http://o-museum.or.jp/）および大塚オーミ陶業株式会社ホームページ（https://www.ohmi.co.jp/）のコンテンツをご参照いただければと思います。特に，大塚オーミ陶業株式会社のウェブサイトには，陶板名画の製作に関して，原画の著作権者・所有者の許諾を得ることから，原画の実物確認・現地調査，陶板への転写に使用する転写シートの作成，職人さんによる手仕事での仕上げ，原画の所有者などによる検品，そして美術館の展示に至るまでの数々の工程の概要が紹介されており，とても興味深い内容です。

また機会を見つけて，この美術館を再訪できればと思っています。